

第3章 蘭島の棚田と周辺の歴史の変遷

第1節 古代・中世

(1) 中世荘園阿豆河荘のシンボル蘭島

有田川流域には8世紀以来「あで」(安諦・阿氏・阿提)郡が成立したが、大同1年(806)平城天皇の名(安殿)をはばかり在田郡(有田郡)に改称したという。「あで」は『和名抄』郷の英多郷に由来し、有田市の宮原地区に比定する説と、旧清水町域の上流部の山間地帯に比定する説がある。後者とすれば、有田川流域の中心部は、河口部の平野ではなくて、本来蘭島を含む上流部にあったものということになる。10世紀末には石垣荘(上荘・下荘)が成立し、上荘の地は旧清水町域にほぼ該当し、12世紀・中世には本家円満院(三井寺)・領家寂楽寺(白川喜多院)・地頭湯浅党が統治する阿豆河荘と呼ばれるようになった(旧金屋町域の石垣下荘は石垣荘に)。のち阿豆河荘は、紀伊国の寺社権力である高野山金剛峯寺との間で、荘園支配をめぐる争いが勃発したために膨大な史料群を残した(『紀伊国阿氏河荘史料』1・2、『清水町誌』史料編にほぼすべて所収)。その中には、上村の住民が地頭湯浅党の暴力「ミミヲキリ・ハナヲソギ…」を訴えた片仮名書き訴状(百姓申状)13箇条があり(写真3-1)、中学・高校の教科書に載る日本を代表する荘園になっている。山間僻地と思われがちな阿豆河荘であったが、神仏の時代である中世には、良木を供給する材木と綿年貢の荘園として注目された。件の百姓申状も、水害ののち荒廃した状況下で、材木収納をめぐるトラブルを契機に発生した事件であった。教員向けの普及書として阿豆河荘の歴史をわかりやすく記述したベストセラー『荘園の世界』(東京大学出版会)においても、扉絵には蘭島が採用された(執筆は『紀伊国阿氏河荘史料』の編者仲村研氏)。そのため、蘭島は中世阿豆河荘のシンボルとして、中学・高校の教育現場から全国に普及したのである。なお、阿豆河荘の表記はさまざまであるが(高橋修氏によると阿豆川の数量が圧倒的に多いという)、ここでは地域民衆の視点を重視して片仮名書き訴状の表記・阿豆河に従うことにした。

このように著名な阿豆河荘であるが、地理的な立地に即して荘園の歴史を解明した先行研究は意外に少ない。山間地の杣を基盤にした広大な領域であり、流動性の高い集落の集合体であったためかと思われる。阿豆河荘は上

下の二方に分かれていて、場合に応じて上荘・上村・上方などと呼ばれた。その境界は「有田川とその支流湯川川の合流点」(『角川日本地名大辞典』30 和歌山県)、「清水と大原との中間地点」(吉沢秀子1977、以下の引用は節末の「引用文献一覧」を参照)などと推測されているが、後述の理由から蘭島一帯と考える。ここでは、荘園調査にもとづく総合調査によって、中世阿豆河荘の空間構成を考え、その上で蘭島の位置を考えたい。

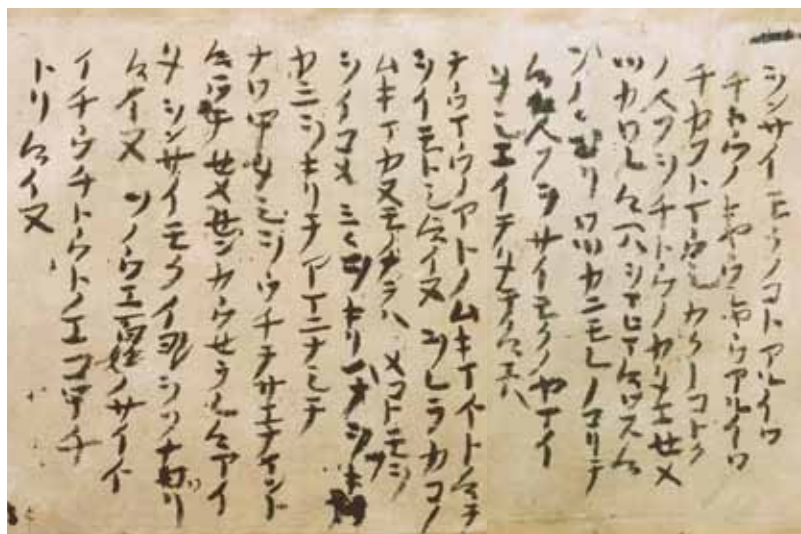


写真3-1 阿豆河荘上村百姓等申状(片仮名書き訴状)部分 高野山金剛峯寺蔵

(2) 異界としての蘭島一荘園のなかの位置

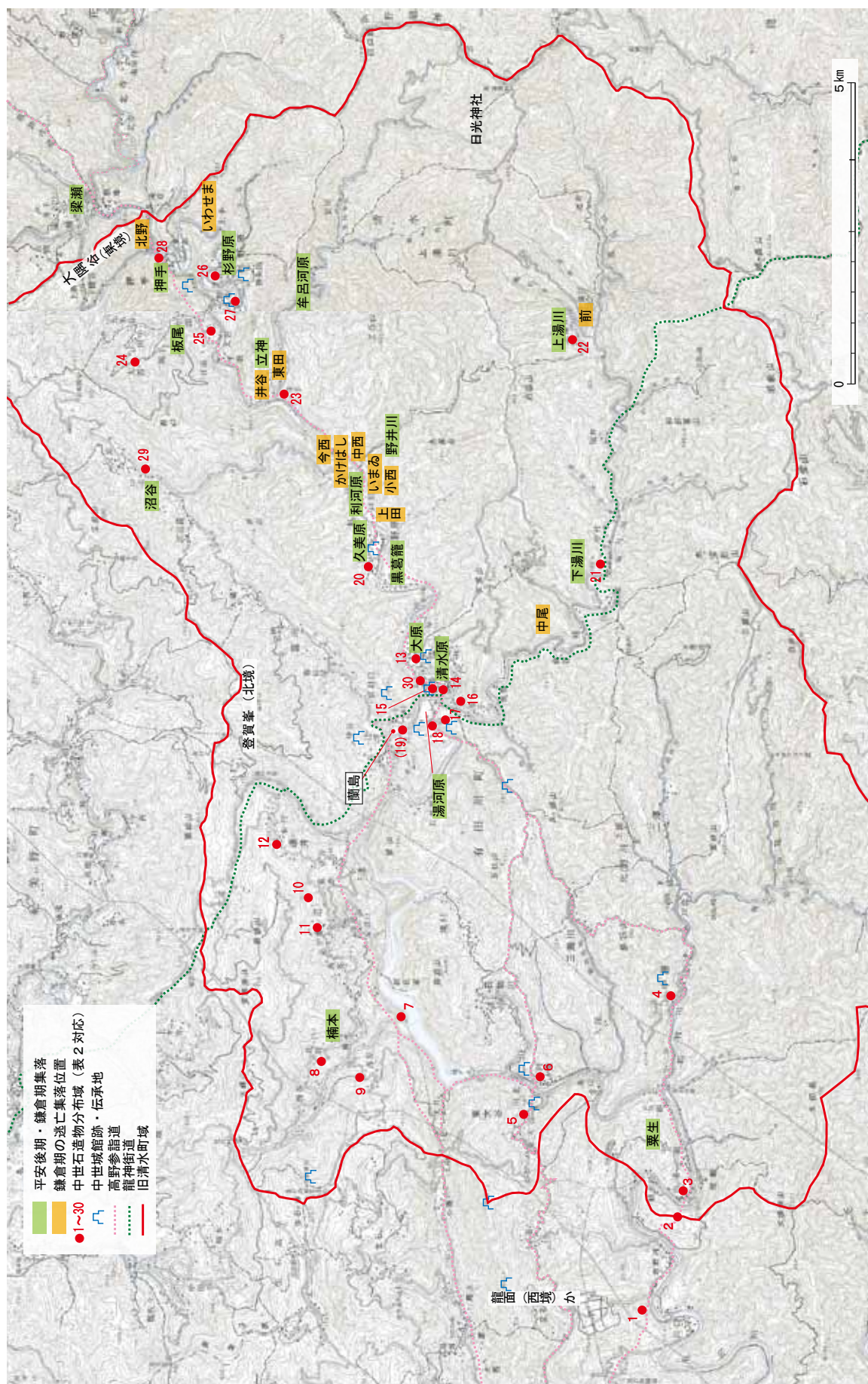
図 3-1 は、中世阿弋河荘の領域を示したものである。この荘園は、有田川の流れにより上下（西と東）に区分されており、支配組織や収納体制・村連合などすべて別個になっていた。片仮名申状事件は、上流部の上村（上方・上荘とも）で発生した事件であり、弾劾された地頭勢力は上村地頭の湯浅宗親だった。中世史料にあらわれる阿弋河荘内の集落（の比定地）を■で示した。阿弋河荘全荘の荘域は、「東限大隅谷・南限白間峯・西限龍面・北限登賀峯」（高野山文書 5 号＝以下『清水町誌』史料編の文書番号で引用する）という四至より復元される。文献史料の限界で、高野山金剛峯寺に近くて事件性の高い上村のみに史料が集中して、早くに不知行化した（実質支配を失った）下村については史料の残存度が低い。さらに、先行研究によって注目されている地頭湯浅氏の非法暴虐行為のひとつである百姓逃亡跡の横領地点の字名を■で図示した（黒田弘子 1995 188 頁）。地頭湯浅阿弋川氏の本拠地（政所・城）については、旧清水町域の中心で清水寺・八幡神社のある清水地区一帯と推定されているが概ね妥当であろう。黒田弘子氏はここを下村地頭館があると推測している（黒田弘子 1990 197 頁）。城郭史（縄張り）研究の成果によると多数の山城が確認されており、戦国期の防衛施設と考えられる（当然鎌倉時代以来の避難施設「いわゆる山小屋」の可能性も想定すべきであろう）。さらに中世にさかのぼる主要な街道と、中世石造物を●で表示した。

以上のデータを踏まえて、阿弋河荘の全体構成を考えると、蘭島の位置がきわめて特色のあるポイントになっていることに気づくだろう。対岸に辻堂があることからもうかがわれるように、まずは東西の龍神街道と南北の高野参詣道の交差点に立地した川岸で、陸路と水路の交わる要衝地（インデックスマップ参照）である。また、集落分布をみると、蘭島より東方（上流部）に集中しており、地頭勢力の支配拠点もほど近い地点に設定されている。清水を下村と考える説もあるが、中世の帳簿を見る限り、むしろ蘭島に近い湯河原を上村内とみたほうが整合的であろう（高野山文書 13 号＝ただし錯簡あり、吉沢秀子 1977 により補正）。古城等の伝承はさておき、少なくとも中世後期においては、蘭島を取り囲むかのように、通称「紅葉山」「古城」「小峠」「西原」「三田」城山が立地し、麓の居館垣内も確認されて、広大な阿弋河荘域における城郭密集地域となっている。以上の点から考えて、この蘭島の地は中世の境界空間で、出口・入口であるという交通・軍事上の最重要地点であると確定される。

1980 年代以後の中世絵図研究等により、中世の境界とは「あつみを持った境界」（石井進 1984）と呼ばれた「ゾーン」であり、そこに住む人々は両属的であると同時に無縁でもあるという自由人・境界人（マージナルマン）とされている（村井章介 1993）。これは古代や近世～現代の線（ライン）で区切る領域観とは異なる中世独自のものといわれ、寺社権力が世俗を圧していた神仏の時代に由来する。中世においては、境界の外側は神々の支配する自然の領域「異界」であり、そこには神々の化身である野獣たちが蟠踞していた。そこを支配できるのは寺社権力につらなる特別の人びと（職能民身分）のみだったとされる。蘭島は、このような阿弋河荘上村・下村の間の境界領域であったと思われる。それではこのような性格を持つ中世の蘭島とは、どのような景観であったのだろうか。

(3) 中世阿弋河荘の災害と蘭島

図 3-2 は蘭島一帯の調査データである。文献史料のみに依存して、ここが水田化されたのは近世の 17 世紀半ば以後と考えるのが通説である。従来の中世史研究は、それを追認して、新田開発さ



れる以前の蘭島の「原風景」を追究してきた。最近では棚田学会の中核メンバーである海老澤衷氏が、中世の主要耕地は西原地区湯子田であり（中世の湯河原村に比定）蘭島は野蒜の群産した畑地であったと推定した（海老澤衷 2000）。たしかに中世の自然は過酷をきわめていた模様で、とくに湯浅氏が地頭として入部して阿豆川氏・保田氏などを分出した 13 世紀においては、集落自体が消滅をするような大規模な自然災害が起こっていた。図 3-1 に逃亡跡の集落在所表示（■の部分）という形で被害実態を明示した。それに輪をかけたのが地頭による非法であった。表 3-1 は、黒田弘子氏の作成した 1275 年（建治 1）6 月 17 日の地頭襲撃により拉致された百姓と牛馬の一覧である（黒田弘子 1995 130～131 頁）。逃亡・死亡跡の集中した上村の上流部一帯においては、地頭の失政によって大規模な潰れ百姓・流民が発生して、集落自体の存続が危ぶまれていた。『紀

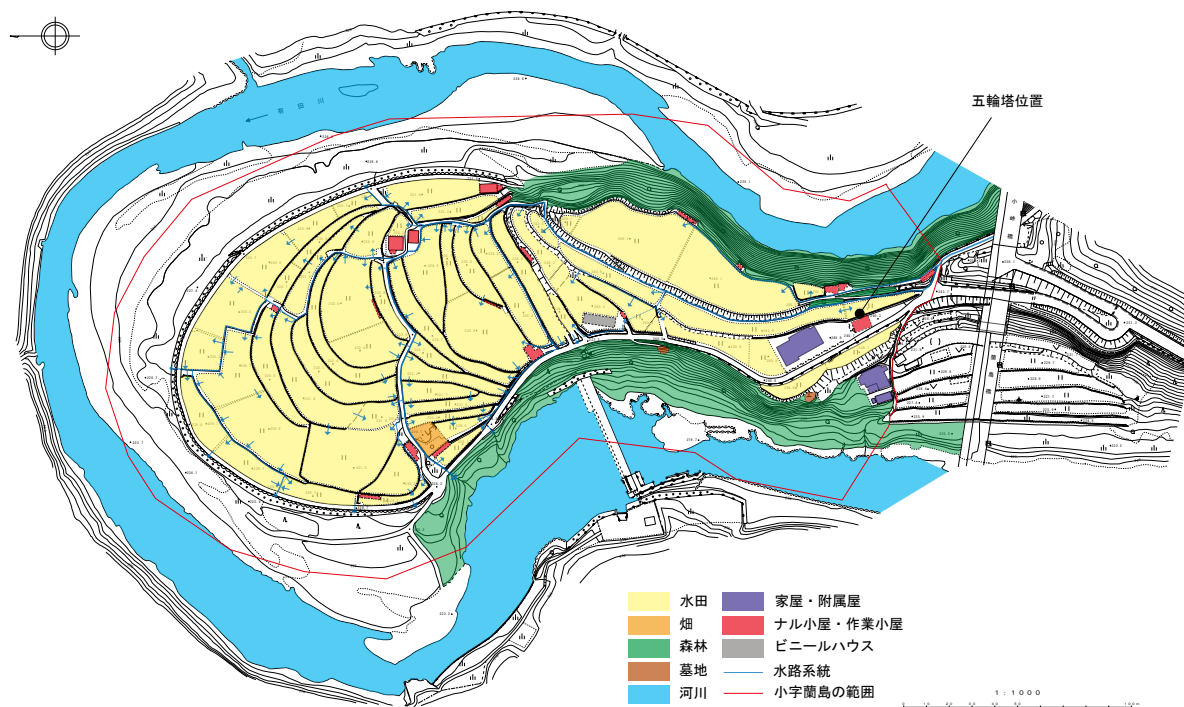


図 3-2 蘭島水田現況詳細図

表 3-1 地頭に襲われた百姓の集落（黒田弘子 1995 より引用）

現地名	百 姓					牛 馬		
	地 名	男	女	小計	注記	地 名	牛	馬
沼 谷	①おうとちはら（法道路原）	4人	1人	5人	預所免			
押 手	②きたの（北野）	1人		1人		(1) きたの（北野）	1疋	
	③なかの（中野）	3人	1人	4人				
	④たしり（田尻）		2人	2人				
杉野原	⑤きたほう（北坊）	6人		6人	預所免			
	⑥こあさ（小和田）	3人		3人				
	⑦のなか（野中）	5人		5人		(4) のなか（野中） (5) くまのかは（熊ノ郷カ）		3疋 1疋
板 尾	⑧たなか（田中）	1人		1人		(2) たなか（田中）	1疋	
	⑨あたらし	1人		1人		(3) 大西		2疋
合 計		24人	4人	28人			2疋	6疋

丸付、かっこ付数字は百姓・牛馬の記載順序。太字の部分は新たに比定した部分。

伊国阿氏河莊史料』が編纂されて以来、このような阿豆河莊集落の流動性の高さについては、中世史研究者間の共通認識だった。だが、片仮名書き訴状の里としてあまりにも著名であったためか、百姓の果敢な闘争戦略と地頭の残虐性が強調されて、すべては駆引きの名目ないし人災として評価・処理される予断が研究者の間に濃厚になっていたのである。

地域に即した史料集『清水町誌』史料編が編纂された1980年代、調査者の峰岸純夫氏はこれが年貢未進の名目などではなく、有田川筋で発生した現実の大災害（洪水）だったのではないかと正面から問題提起した。集落がまるごと失われてしまう規模の流民状況が発生している事実を、単純に地頭領主の収奪とのみ考えたり、年貢未進のための百姓の巧妙な駆引きとのみ見るのはあまりに中世の現実とかけ離れた理解ではないか、という主張である。中世段階においては自然との闘争（神殺し＝開発）こそ人類史の課題にするべきとして、のちに災害歴史学の始祖のひとりになっていく峰岸氏が阿豆河莊研究に関わったのはまことに僥倖であった（峰岸純夫1981）。

また湯浅党の領主が、地頭としては全国的にも珍しい善政の演出者、つまり明恵ら禅律僧の支配イデオロギーを駆使して巧妙な統治をする類まれな支配者であるという事実も判明してきた（高橋修2001）。いま、1275年建治の片仮名書き申状事件の背景を全面的に見直すべき時機が到来したのである。今回、中世の蘭島の風景を明らかにする作業も、実はこの課題と密接にかかわるものとする。蘭島に対する中世人の眼差しを知ることにより、片仮名書き申状闘争に至る葛藤の筋道があきらかにされるはずである。

そのための前提として、蘭島の通説（近世に初めて水田化されたという文献史学にもとづく常識）を再検討必要がある。近代の二・八水害の例を出すまでもなく、現代を到達点として消去法を取るような単純な技術進歩史観を用いると、事態を見誤る可能性がある。阿豆河莊の片仮名書き申状で、「うずくまり田」「伏田」が争点になることから明らかなように、文献史料（帳簿）上の石高等数値データを過度に信用するのも危険である。次章でみるように、西原の湯子田地区は中世最大規模の集落があり、観音堂石造物を見る限りその成熟度は荘内の随一といえる。当然、蘭島を含めて早期に耕地化がなされていたが、13世紀以後の大規模な水害と地形変化により「利水の条件が変わった」という可能性を想起すべきだろう。

（4）蘭島の周辺の中世開発 ―湯河原・シタユの復元

境界の地・蘭島の景観を考える前提として、その周辺の中世開発の状況を確認したい。海老澤衷氏は先述の論文において、立券時の阿豆河莊検注目録写（高野山文書5）の分析から、有田川沿いに分布する主要集落「湯河原」「清水原」「大原」「黒葛原」「久美原」「利河原」「牟呂河原」「板蘆原」のうち（記載順）、「湯河原」を西原湯子田地区に、「清水原」を清水（寺原）地区に現地比定した。「久美原」までの5カ字は条里坪付表示をもつ伝統的な集落で（条里地割を採用とは限らない）、戸川・久野原・小原・清水・西原一帯が、阿豆河莊のなかの先行開発地域であったことになる。なかでも水田耕地が6町の「久美原」と5町半の「湯河原」（小名として「井川」「樋」「河辺」「辺田」「西圭」）は、支配拠点地域の位置を占めていた（のちに領主政所となる「清水原」でも3町半）。この地域は後の上村（上荘）の西隅部分に分布しており、中世の開発は上流の山間地域（上村の東）と蘭島から下流部の下村（下荘）にむけて広がったことになる。海老澤氏によれば、蘭島の周辺は、12世紀段階から清水と湯子川に「清水」「湯河原」という阿豆河莊の拠点的地が立地したわけである。

「湯河原」耕地を湯子田に比定した海老澤氏は、「中世＝シタユによる湯子田への利水、近世＝

ウワユの開削による蘭島・蘭への利水」という仮説を出した。現存するウワユについては詳しい分析がなされたが（第3章第2節「近世」参照）、シタユについては具体的には明らかにされて

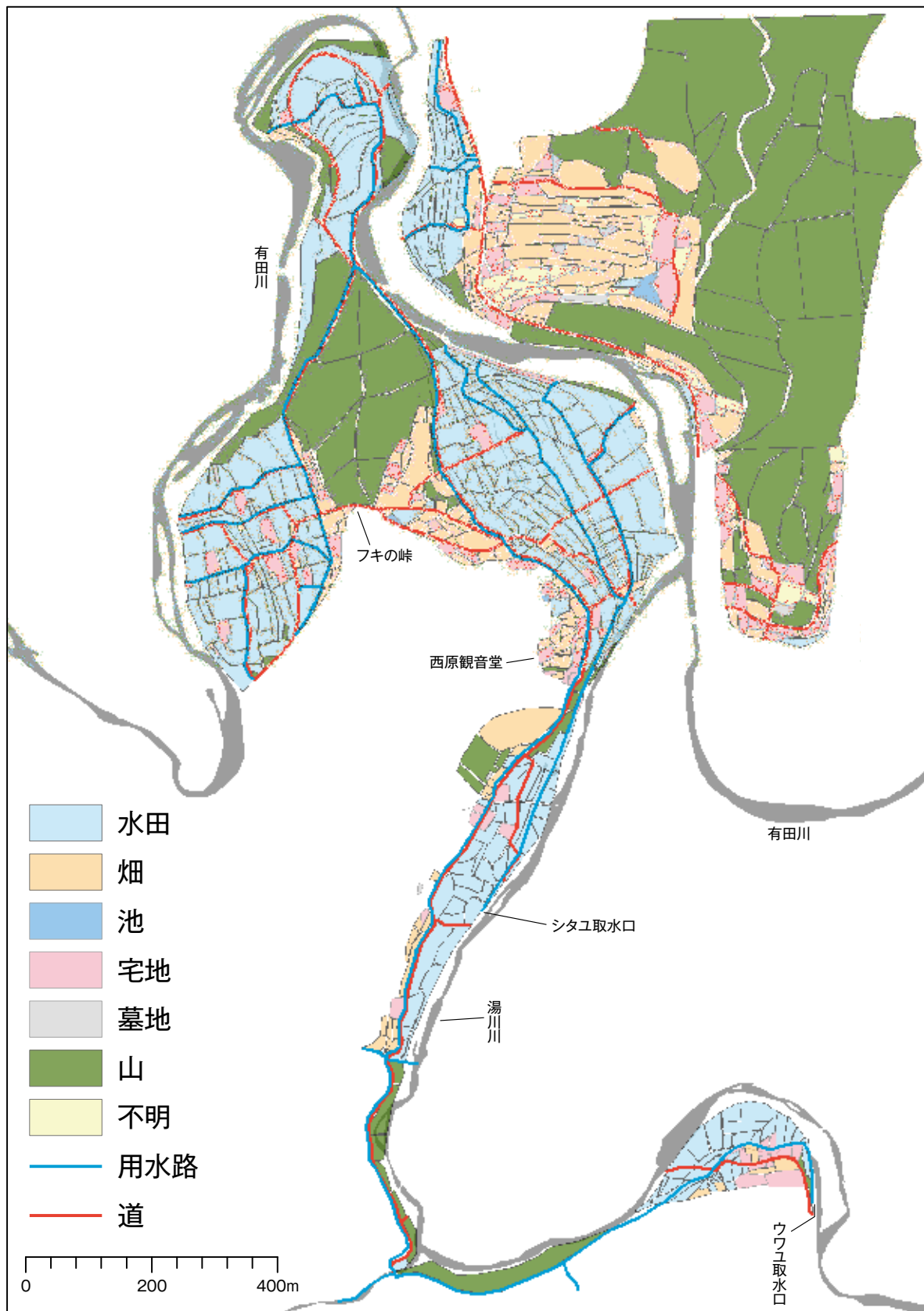


図 3-3 「地籍図集成図 ウワユ・シタユの明治期耕地形状

いない。湯子田地区は二八水害によって流出したため、戦後早期に耕地整理が行われて原景観を留めない。これについては、米軍撮影空中写真と所謂「明治期地籍図」を蒐集して復元作業を行った。それを用いて作成した明治初期の湯子田地区の復元図が図 3-3 である。シタユはウワユの開削により統合されたといわれたが、明治初期の段階まで小字坂本（阪本）に取水口をもち、上手・下手の二流に分かれて西原地区の主要耕地を潤した様子が明らかになる。耕地整備のなされた今日においても、シタユの一部は痕跡をとどめている（写真 3-2）。中世の地形および利水環境の復元には慎重を要するものの、少なくとも明治期のシタユに該当する利水施設は中世以前に遡るものであろう。前出文書の中世小名にあらわれた「井川」「樋」は現在のシタユの分水と思われ、「河辺」「辺田」「西圭」などと呼ばれた耕地が現湯子田の一带に分布したのである。ただし、その取水口がさらに上流部で、ウワユの位置（小字広井原）である可能性も決して捨てきれない。明治期地籍図のなかでウワユ・シタユの水路ラインが確認できる小字名は以下の通りである（このうちゴチックは両方の水路が交錯して図中にある図面である。）



写真 3-2 西原湯子田地区に残るシタユの痕跡

ウワユ 「蘭島」「広井原」「池尻」「七之臂原」「唐谷」「坂本」「横畑」「溝ノ尾」（以上清水村地番順）「芝田」「前」「蘭」「中通」「紙屋」「城山」「溝ノ尾」「青柿」「坊ノ前」（以上西原村地番順）

シタユ 「坂本」「横畑」「湯子田」「溝ノ尾」（以上清水村地番順）「和田」「溝ノ尾」「湯子田」「青柿」「坊ノ前」（以上西原村地番順）

領主支配帳簿に残るデータは、収奪の可能性を示す範囲を示すにすぎず、「伏田」を含めた水田耕地の実態ではない。中世集落の流動性・不安定性については先述の通りだが、「湯河原」集落の実態について中世石造物から追及したい。

（5）明治期地籍図に描かれた蘭島・湯子田

現在確認されている蘭島周辺の地籍図は以下のとおりである。

A 明治六年調査 耕地絵図面 第五大区五ノ小区（写） 明治6年（1873）（有田川町所蔵・清水行政局所管）

一綴二十一舗。1 番中原村から 19 番押手村までの村ごとの耕地図（9 番に西原村、10 番に清水（寺原村）あり 写真 3-3）と「八幡山道路図面」「八幡村大字西原惣図面」（写真 3-4）の二十一葉。各村ごとの個性的な村図の集成で、三田・清水・宮川などは青・赤・緑・黄の多彩色。昭和 46 年（1971）試作の保田紙を使った写本。大小区制の採用は明治 4～12 年（1871～79）。

B 字限図面 紀伊国有田郡清水村 明治8年（1875）10 月（有田川町所蔵・清水行政局所管）

佐藤甚次郎『公図』（古今書院 1966）等地籍図研究における「地租改正における地引絵図」に該当する図面と思われる。「蘭島」は全 62 枚中の第 1 番。



写真 3-3 Aの「清水(寺原村)耕地図」

**C 字限図面第五大区五小区西原村 明治 8 年
(1875) 10 月 (和歌山県立文書館所蔵 出納
番号 9157-75)**

表紙に「八幡村役場印」「第五大区五小区」朱印あり。青（水路）・赤字（地番）・緑（他の大字耕地）を彩色。1 番芝田から 16 番深谷までの小字と「村誌図」等 3 枚の村総図（写真 3-5）。耕地面積を図面中に詳細に書き出して、青（水路）・赤字（地番）・緑（他の大字耕地）を彩色。「地租改正における地引絵図」に該当する図面と思われる。

**D 地押調査更正 字地図面清水村(和歌山県立文
書館所蔵 出納番号 9148-2)1885-89 推定**

地籍図研究の言う「地押調査における更生地図」である。表紙に「八幡村役場印」朱印あり。和紙一綴六〇舗のうち「蘭島」は 62 番中の第 1 番（写真 3-6）。川・水路を青（灰色変色）、道を太墨線、西原村耕地を薄い朱色に彩色した図面。地押図であることから 1880 年代後半。

**E 大字西原惣図及字限図 有田郡八幡村 明治
24 年 (1891) 3 月 (有田川町所蔵・清水行
政局所管)**

青（水路）・赤字（地番）・緑（他の大字耕地）を彩色。土地台帳附属絵図。和紙で青（水路）・赤字（地番）・緑（他の大字耕地）を彩色。1 番芝田から 16 番深谷までの小字図。タイトルに大字惣図とあるが欠く。

F 土地台帳附図 清水 1（清水）

厚紙の表紙仕立てで一綴。内容は八幡村大字清水内の地籍図で、総図、小字一覧表、1 番蘭島（写真 3-7）～ 62 番溝尾までの小字図から成る。青で川・水路、太墨で道、朱線で新たな開発改変を記す。末尾に「昭和三十八年十月十五日 土地改良事業完了に付、別冊（地図）を設ける」との付箋がある。1889 年以後の成立である。

G 土地台帳附図 清水 2（西原）

厚紙の表紙仕立ての一綴。内容は八幡村大字西原内の地籍図。清水 1 と同体裁だが総図を欠く。



Aの「西原村耕地図」



Cの「西原村 村誌図」



Dの「字蘭島」



Fの「字蘭島」

(6) 中世石造物による中世湯河原・蘭島の復元

表 3-2 は阿豆河荘一帯の中世石造物の一覧表である。有田川流域研究会（『清水町誌』史料編）

表 3-2 阿豆河荘中世石造物データ一覧（図 3-1 対応）

No	在所	名称	種別（凡例参照）	備 考	立地 類型	藤本 2000	確認状況
1	川口野坂	野坂の卒塔婆	長足五輪塔婆（正平8）	峠の道沿い 町石状 町指定	5		○
2	岩野河	九鬼の登峠	長足五輪塔婆（正平8）	峠の道沿い 町石状 町指定	5		○
3	粟生	吉祥院薬師堂	宝2 五	薬師堂は室町期建造物 宝：天正6	1	1	○△
	川合	油滝	五	流出	5	2	
	三瀬川	地藏堂	宝	高野街道古道沿い	1	3	
4	中原	霧ヶ曾谷 畑	五	大城城塞路に通じる道路沿い			未
5	東大谷	経塚遺跡	宝 五	鎌倉期経塚 県指定	5	4	○
	日物川	観音寺	宝 五		1	5	
6	二川	安楽寺墓地	五3	「東殿之廟所」と伝 移動 町指定2	1	6	○
	境川	丹生明神	石製神像	もと五社山「宮跡」に祀ると伝	5	7	
7	楠本	脇浦橋詰祠	地藏（天正1銘）	二川ダム建設時に地中より出土	5		△
8	楠本	前島家	宝2 五5	宝：応永8 伝結城式部墓 町指定1	4	8	○
9	楠本	法福寺東墓地	宝残 五	五：永正1	1	9	○
10	沼	鉢伏五師堂跡	五	絵巻物にある三昧の風景	2		○
11	沼	明王寺境内	宝 五 多数	宝：永禄7 応永4の鰐口	1	10	○未踏多
12	遠井	永楽寺	五	五：元亀	1	11	未
	宮川	柳垣内	五	さよの墓と伝	5	12	
	宮川	泉水寺跡	宝など		1	13	
13	清水	橋本家裏墓地	宝3	保田宗隆の宝 元亀3・天正4 町指定	4	14	○
	清水	清水城跡	五残 10 余		3	15	
14	清水	八幡社産道前墓地	宝（2） 五（10）	松田家墓内			△未
15	清水	清水寺	宝（3） 五（33） 一石（2）	寺院脇に数基 八幡社にも残欠	1	16	未
16	清水	下番三昧	宝（2） 五（20）	山麓部の入り口 用水路あり	2	17	△未
17	西原	西原観音堂	宝2 五多数（別表）	宝：永享4 青石あり	1	18	◎
18	西原	フキの峠	宝3 五残（別表）	お地藏さん 青石あり	5		◎
19	清水	蘭島	五	保田長生禅門墓と伝 畑中家の田中	5	19	
20	久野原	法徳寺無縁墓地	宝 五 一石五	残欠多 三田・遠井・久野原より集積	1	20	○
21	下湯川	下村三昧	宝 五6（永享13）		2	21	
	下湯川	中村墓地	五		2	22	
22	上湯川	薬王寺裏	五	小松家の墓所	4	23	
23	井谷	宝亀寺裏墓地	宝 五 石碑	義民の供養塔 江戸期か	1	24	未
24	板尾	森本家裏	五3	水害の流出を集めた			？
25	板尾	阿弥陀堂	宝4 五3 残	宝：明徳3 町指定	1	25	未
26	杉野原	雨錫寺	宝 五	阿弥陀堂脇に数基	1	26	未
27	杉野原	荒神社天子山	宝 五	阿瀬川定仏墓と伝 天子山	3	27	未
28	押手	大日堂	五	押手分校裏の立福寺境内か	1	28	未
29	沼谷	大歳神社	板碑（正平19） 宝（明徳3）	薬師寺「岡寺」にあったと伝 県指定	5	29	未
30	清水	弁天の那智さん	宝1		5		未

凡例 種別の項目 宝＝宝篋印塔 五＝五輪塔（組立式） 一石五＝一石五輪塔 後ろの数字は各基数（）は各部分合計数

や青山学院大学藤原良章ゼミ（藤本頼人 2000 等）、有田川教育委員会文化財審議員等の調査研究により、有銘石塔を軸とした形態編年の行える水準に達している。図 3-1 にはその分布を示した。城郭や被課税水田耕地と同様に、中世石造物についても蘭島の一帯は濃密に分布する集中地域である。もちろん、中世石造物が建立時点の原位置にあるとは考えがたく、後世の開発編成のなかで移動しているとみられる。したがって、表 3-2・図 3-1 はあくまでも現状にもとづく概況であり、各個体についてはその履歴を文献史料以上に詳細に史料批判しなければならない。

中世蘭島を考える上で重大な手掛かりになるのは、次の 3 つの史料群である

- a 表 2 の 19 久野原法徳寺共同墓地 五輪塔水輪（旧蘭島畑中家所在）（写真 3-9）
- b 表 2 の 18 フキの峠地蔵祠前石造物群（全景写真 3-11）（写真 3-12 ～ 14）
- c 表 2 の 17 西原観音寺石造物群（全景写真 3-18）（拓本写真 3-17）

a に注目したのは藤本頼人氏である。『紀伊続風土記』編纂のための地元差出史料（文化 5 年 12 月南家附山保田組「続風土記調帳」『清水町誌』史料編 630 頁）のなかに、寺原村の項目で「亀田屋敷跡」「極平御墓段」の間に「蘭島」があり

蘭嶋

一 五輪石塔 同村

長生禅門と申、保田家之由申伝へ候共、仮名実名とも分り不申、蘭島と申所新田場畔之間
ニ有之候得共、塔壊申故分り不申候

同じく文化 7 年 6 月清水村控湯子氏「続風土記御調に付書上帳」『清水町誌』史料編 638 頁）に
あららぎ嶋

一 五輪石塔

長生禅門と申、保田家之由申伝ニ候得共、仮名実名とも相分り不申、蘭島と申所新田場畔
ニ有之、五輪散乱ニ及、年号月日とも相知レ不申候

とあり、後者がほぼそのまま文化 7 年（1810）6 月『山保田続風土記』に掲載されている（同 707 頁）。藤本氏はこの記述に注目し、氏の分類の第⑤類型（後述）として中世の蘭島を考える手がかりとした（藤本頼人 2000 49・50 頁）。

今回の調査では、この提起を重視して、再度荘域全体にわたる中世石造物の検証を実施して、藤本氏の成果表にいくつかの事例を加えた。問題の a 塔についても、蘭島の地権者である畑中氏が所有する水田の畔（写真 3-8、図 3-2）にあった 2 つの石塔を、一時自家の墓に移したが、他人の家筋の供養塔を置くのはいけないと思って、久野原地区の無縁所に移したと証言を得た。記憶



写真 3-8 蘭島の五輪塔が存在した位置



写真 3-9 久野原無縁墓に残る中世石塔

するところでは、ふたつの石塔は大きな丸い石であり、現地を確認したところ2基が推定指定された（写真3-9）。大型の五輪塔の水輪と空風輪であったが、形態編年から推して中世のものとして不自然ではない（ただし、これを蘭島のもものと断定することは難しく、今はひとつの目安に留めたい。近世後期、文化5年（1808）段階の伝承であるが、蘭島の扇頂部分の「新田場畔」に中世領主保田長生の「五輪」が壊れて散乱したままになっていた、という情報は重要であろう。この石造物が、中世に遡る可能性はきわめて高い。それは、近接するb・cの2つの石造物群との関係である。bは、蘭島と西原地区の中心集落をつなぐ狭窄部の切り通し道、通称「地蔵さん」「フキの峠」（フキは湧水の意）に位置する。Cは、西原集落の中心・政庁にあたる村堂観音寺の境内墓地である。Cの中には、有田川流域で最古の紀年「永享二二年壬子三月十四日」（1432年）銘をもつ五輪塔の地輪がある。他にも同時期と思われる大型石塔や緑色片岩製の宝篋印塔を含む大量の遺物があり、この西原地区一帯に（少なくとも14世紀末より）継続的な大集落が広がっていたと推定される。むろん、現在のa b c所在地は、中世以後のある時点で集められたものに違いない（個別の調査データは次節にまとめて提示した）。だが、14世紀末の西原（12世紀「湯河原」）の版域が、西原集落～蘭地区・蘭島地区にわたって拡大しており、aの「石塔」は後世領主一族の墓と伝承される規模のものだったことになる。石造物で見る限り、領主居館の所在地である清水地区（寺原）や久野原地区をも凌ぐ規模であったと思われる。このような成果は、蘭島の開発が中世に遡る可能性の高いこと、ウワユの原型となる水路は中世に成立していることを示唆するものであろう。

だがここではあえてもう一つの可能性を指摘しよう。a bの石塔群が建立時の原位置を維持していると仮定した場合である。中世石造物は、その多くが領主や村落共同体の中心施設の近辺に置かれる。阿豆河荘の石造物を分析した藤本氏は、その立地を5つに分類できるとして①寺院（跡）②三昧・共同墓地③城郭跡④個人宅・墓地⑤その他の五類型にわけた。先のc群は当然①になる。aは⑤となっている（bは当時未検出）。⑤は、経塚の存在を示す標識だったり（表3-2のNo.5）、禁忌の地点や見晴らしのいい場など「ポツリと独立して存在する傾向」があり、総じて「畏怖すべきイメージを植え付けるような特異な場」に所在するという。藤本氏の考察からは漏れたが、表3-2のNo.2は、龍神街道ぞいの峠道で石垣荘と阿豆河荘の境界表示（中世のゾーンとしての境域空間）を示す指標である（写真3-10）。典型的な⑤の類型であろう。蘭島の扇頂にあったaの五輪塔、そして蘭島と集落をつなぐ峠の聖地に祀られたbの宝篋印塔は、ともども⑤の類型に違いない。すなわち人間の領域である集落と何らかの聖域（ないし自然界・異界）の境界を示す標識だったと考えられる。この場合、蘭島は人間の立ち入りを拒む未開の地であったか、何らかの人為的な聖域であったか、二つのケースが想定されよう。しかも、この地点自体が、阿豆河荘という巨大荘園のなかの「ゾーンとしての境域」に立地している。おそらく、ここが荘園の境域となる理由は、中世の蘭島の性格に由来するのであろう。



写真3-10 九鬼の峠の五輪塔婆

このような独自の世界観にもとづく景観が、17世紀半ばにいたり、水田開発至上の価値観によって破壊され、年貢を生み出す米作りの耕地に改造されたのである。失われたものは中世の人々の自然観だったことになる。

(7) 西原地区石造物調査 人界と異界の二つの石造物群

表 3-3 フキの峠石造物悉皆調査一覧

No.		種別・部位		高mm	幅mm	厚mm	備考
1	A	五輪塔	空風	* 225	146	35	頂点部欠損
	B	宝篋印塔	笠部	169	215	233	縦に割れる 耳部全欠損
	C	宝篋印塔	塔身	171	132	138	
	D	宝篋印塔	基壇	183	219	217	上部にホゾ穴（直径 72）
	E	宝篋印塔	台座	139	303	319	空風欠損
2	A	地藏仏		400	170	100	横に割れ 顔面削取り
	B	宝篋印塔	台座	78	235	340	青石
3		宝篋印塔	相輪	* 274	111	111	上部欠損
4		五輪塔	火	139	279	255	上部欠損か



写真 3-11 フキの峠の地蔵全景



写真 3-12 フキの峠の地蔵近景



写真 3-13 フキの峠の地蔵 緑泥片岩製宝篋印塔基壇



写真 3-14 フキの峠の地蔵会式の様子

表 3-4 西原観音堂石造物悉皆調査一覧（上表：総個数 下表：個表）

種別	部位・個数
五輪塔	空風輪4、火輪3、水輪3、地輪1
一石五輪塔	3
宝篋印塔	相輪2（青石1）、笠部1、塔身1（青石1）、基壇1（青石1）
青面金剛	石仏1、台座1
地藏仏	10
手水鉢	1

No.		種別		高mm	幅mm	厚mm	備考
1	A	五輪塔	空風	206	151	170	
	B	五輪塔	火	128	200	200	縦に割れる
	C	五輪塔	水	* 980	227	227	下半分欠損
2		一石五輪塔		220	83	86	空風欠損
3		一石五輪塔		250	130	126	空風欠損
4		青面金剛碑		406	236	166	
5		宝篋印塔	相輪	* 153	115	112	下欠損
6	A	五輪塔	空風	221	151	156	
	B	五輪塔	火	169	227	233	
	C	宝篋印塔	基壇	89	264	244	青石
7	A	五輪塔	空風	214	153	122	
	B	五輪塔	火	134	208	200	
	C	五輪塔	水	168	226	222	
	D	青面金剛碑	基壇	136	265	221	
8	A	五輪塔	空風	201	147	152	
	B	宝篋印塔	笠部	232	249	252	
	C	五輪塔	水	166	201	212	
	D	五輪塔	地	258	317	312	永享4銘（1432）
9		一石五輪塔		392	115	109	
10	A	宝篋印塔	相輪	* 121	72	72	下欠損 青石
	B	宝篋印塔	塔身	128	110	112	横割れ 青石
11		地藏仏		395	217	95	
12		地藏仏		390	255	130	
13		地藏仏		334	149	48	横割れ
14		地藏仏		310	159	57	
15		地藏仏		302	160	75	
16		地藏仏		265	153	80	顔面削取
17		地藏仏		* 255	210	110	上部欠損
18		地藏仏		* 240	183	107	顔面・下部欠損
19		地藏仏		* 239	262	132	上部欠損
20		地藏仏		448	245	137	横に割れる 復元接合
21		手水鉢		300	598	355	明治 28 銘（1895）



写真 3-15 西原観音堂石造物
永享4年銘五輪塔



写真 3-16 拓本採取状況



写真 3-17 永享4年銘五輪塔拓本



写真 3-18 西原観音堂石造物全景

引用文献一覧

- 石井進「坂と境」（『日本民俗文化大系6 漂泊と定着』小学館 1984 年）
- 石井進「百姓申状と阿豆川荘の世界」（『中世を読み解く』東京大学出版会 1990 年）
- 海老澤衷「ノビル畑から棚田へ」（『日本の原風景・棚田』1 2000 年）
- 黒田弘子『ミミキリハナヲソギ』吉川弘文館 1995 年
- 黒田弘子「裁判でゆれる荘園」（『人物でたどる日本荘園史』東京堂出版 1990 年）
- 島田鋭二「解説」（『清水町誌』史料編、1982 年）
- 高橋修「阿豆川荘一領主間の争いと百姓たちの闘争」（『きのくに荘園の世界』上 清文堂 2000 年）
- 高橋修『中世武士団と地域社会』清文堂 2000 年
- 高橋修「武士団の支配論理とその表象」（『歴史評論』611 2001 年）
- 仲村研「解説」（『紀伊国阿氏河荘史料』2 1978 年）
- 仲村研「地頭非法と片仮名言上状」（『荘園の世界』東京大学出版会 1973 年）
- 藤本頼人「阿豆川びとのところにふれる」（『史友』32 2000 年）
- 峰岸純夫「中世の変革期と一揆」（『一揆5 一揆と国家』東京大学出版会 1981 年）
- 峰岸純夫『中世災害・戦乱の社会史』吉川弘文館 2001 年
- 村井章介『中世倭人伝』岩波新書 1993 年
- 吉沢（徳田）秀子「阿氏河荘における農民闘争」（『歴史評論』326 1977 年）